

現

在大学や高専の土木系学科の女子学生比率は一割から二割程度に達する。土木工学の守備範囲が暮らしに直結する身近な問題であることを考えると、志す女子学生が増えてきたのは自然の成り行きであろう。しかし、彼女達が卒業して社会に巣立つ時には、依然として厳しい就労環境に直面し戸惑うことが多いようである。

土木技術者女性の会は、女性の土木技術者が極めて珍しい存在であった一九八三年に、各組織で孤軍奮闘している女性技術者の相互支援のためのネットワークとして約三〇名で発足した。当会は従来積極的に広報に努めてきたわけではないので入会希望者は会員の口コミや紹介によるものが多いが、一九九〇年代に各企業で女性技術者の採用が増えたのに伴って当会の会員数も伸び、最近では一五〇〜二〇〇名位で推移している。全国を四支部に分け、勉強会、見学会、学生向けのキャリアセミナー、交流会など、実質的な活動は支部毎に行っている。

土木の世界に限らないが、少数派にとって共通する悩みは「ロールモデルの不在」であろう。将来どのようなキャリアパスの可能性があるのか、結婚・出産・子育てなど個人の生活と仕事のバランスをどうとればよいのか、職場で同じ様な立場の先輩や同僚がいない、目標とすべきお手本が身近にいないのが、精神的な障壁となりうる。しかし、各々の組織では少数派ゆえの

各 人 各 説

土木技術者女性の会の歩みと役割

土木技術者女性の会 会長／東京大学生産技術研究所 准教授

桑野玲子

Reiko Kuwano



孤独感や重圧を感じていても、会を通して様々な人々と接しているうちに、気が楽になり前向きな姿勢になることも多い。当会の本質的な役割はそのようなところであり、会が擁する多様な人材こそが、会の宝であり会員サービスの源なのである。当会では、さらに会員以外の女子学生へ、土木分野の様々な職種や女性土木技術者の仕事内容を紹介する目的で、会員の働きぶりを『Civil Engineerの扉』という冊子にまとめて一九九六年版と二〇〇六年版を出版した。また、同様の趣旨で近々土木学会から出版予定の書籍『継続は力なり』にも編集協力している。会の発足から三十年を重ね、社会情勢も土木技術者をとりまく環境も大きく変わり、男女共同参画やダイバーシティ推進が各所で重要視されるようになった。東日本大震災を経験し、市民生活の安全を守るといふ土木の仕事の使命が再認識されたとも思う。一方で、それらが一般の人達に依然として正しく理解されていないと感じる場面も多い。人々が安心して暮らせる国土をつくりそれを維持するために土木技術者が影ながら貢献していること、貢献の範囲は広く多様であること、また志があれば男女を問わず活躍の場があることを理解してもらう努力が一層必要だと思う。当会では、六月二十二日に創立三十周年記念イベントとして、「どぼく未来フォーラム」を開催し、次代を担う学生さんや若手技術者と共に土木の原点を考える予定である。